

『和の文化資本』

LIBRARY ICHIKO 155 SUMMER 2022 7月31日 発売予定



A5 変形 128頁 1650円 (本体+税10%)

【監修・アートディレクター】
河北秀也 (かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士 (やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二三年十月末発行予定です。

日本文化が本質的な普遍性を有している。これをナシヨナリズムへ表象する仕方しかできない。日本語は論理的な言語ではない情緒的な言語だとか、日本人は態度がはっきりしない、物事を水に流したがるか、ワビダサじだ花鳥風月だとか、表層でしかまだ捉えきれないまま多数の日本論・日本人論が出ている。

まず、日本語の言語表現は主語がない「論理構造」を本質的に有しており、「コブツ命題形式」の理論思考がない、まったく別の理論構成を有している。この述語制が理論生産されていないことが、すべての「なしている」制作に「なされていない」客観化としてある。「つまり、自らなしていることを自ら知っていない」というシニフィエ界にとどまっている。ここを開削していくのが、和の文化資本の探究である。

第二に、文化はナシヨナルな一般性にあるのではなく、場所ごとの文化の違いの多様性に表出されており、それが主客非分離の対象構成になっていることの把握である。

第三に、労働と資本を最初から分節化されたものとして考えるため、財産やマネーとしてかつ倫理的に「悪」だと設定されて、「資本」そのものを観られなくなっている。資本概念の転換がなされないと、日本の多様な文化資本とその本質とが認識されないままになる。

加えて、日常生活での優れた道具技術が、国宝的な文化財へと特殊疎外されて、道具技術そのものの日々の身体動作の行為において把握されなくなり、文化が、日常から外在化されてしまっている。それはまた、自然への非分離の感覚・情緒が、消費財の商品的物体に囲まれた生活において鈍麻していくことにつながっている。

本誌は、文化学追究の長い考察検証から、日本文化の本質原理を「非分離、述語制、場所、非自己」として探して来た。その深みをより広く見ていくため、近代西欧原理の限界をこえる新たな本質的普遍性として、世界へ貢献できるものへと磨き上げていくことだ。

戦争という愚行は、知的資本の劣化からもたらされるが、それは知的資本が主客分離の文化資本によって転倒を余儀なくされるためで、主客非分離の哲学・技術からの知的資本を世界へ明らかに示していくことで、少なからぬ貢献をなし得ていくと思う。

日本は、和の文化資本に立脚して、経済、技術において世界を領導できる文化力を有している。二千年の文化遺産を、日本語言語や心性や技術において、しっかりと対象化し客観化し、実際活用していけるようにすることを願う。文学やアートにおいては言うまでもない。

大きな世界のゆらぎは、本質の再設定からしか開けないと思う。それを日本文化、和の文化は持ち得ているのだ。

▼山本哲士「和の文化資本」探求のための哲学的原理」▼小山聡子「見えないモノの文化」▼田中仙堂「侘茶」はいかにして文化資本になったのか」▼鈴木貞美「なぜ、日本におけるナラトロジーが必要か(3)——柳田國男の民俗学、その評価の問題」その1」▼長谷川権「涼しさの文化——俳句はなぜ短いのか」▼陳柯岑「村上春樹とサルトル『存在と無』——『回転木馬のデッド・ヒート』試論」▼兵藤裕己「19世紀末・明治20年代」日本の近代小説その可能性と限界」▼田中俊徳「森の文化」シニエの文化」▼浅利誠「述語制言語の日本語と「コブツ」【連載7】」▼カラー特集「マヨルカ島の布」

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com

ehescbook.com

ご注文は「RCC」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局

tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

和の文化資本

LIBRARY ICHIKO 155 SUMMER 2022 1950円 (税込)

ISBN 978-4-910131-34-4 C1010 ¥1500円

書店名

部数